

【表紙】

五郎正宗 全四巻

【表紙裏】

【1頁】

(十六ミリ)

孝子 五郎正宗

全四巻 四一九米

台湾総督府

P第九二号

検閲済

有効期間

自昭和十七年一月十九日

至昭和二十年一月十八日

活動写真「フィルム」検閲

規則第十条第二項ニ依リ

手数料ヲ免除ス

障害ナシ

【2頁】

【3頁】

五郎正宗 全四巻

梗概

父を訪ねる旅の空で母に病死された五郎は寄辺なき身を桶屋太郎
助に救はれた五郎が刀鍛冶になり度いと願つてゐたので太郎助夫婦は
彼を御番鍛冶行光の許へ弟子入りさせました元より好きな道とて五郎
は日ならず仕事を覚えてしまひました、或る日偶然の事から師と仰ぐ
行光が多年五郎が探し求めてゐた父だと知り二人はその奇遇をよろこび
ました。五郎の出現に依つて行光の妻お秋は実子新太郎に家督相続
上の不安を感じ、事毎に五郎に辛く当りました遂には五郎毒害を
計りましたが事前にそれを知つた五郎は泣く泣く家を出ました。

その事がお秋の父森川馬之丞に知れ馬之丞は我が子乍らお秋の仕打に怒つて世間や行光への申訳にお秋を手打ちにしやうとしましたが母の身を案じた五郎はこれを知るや、宙を飛んで帰り身を以

【4頁】

てお秋をかばつた為馬之丞の刃に背を斬られ重傷を負ひましたが苦しい息の下からも「お母様が無事でうれしい」と言つて人々を泣かせました 此の神の様な五郎の真心に流石のお秋も□□□人の道に立返りそれから実子新太郎同様の愛を五郎にそゝぎ初めて五郎に喜びの目が廻つて来た

終り

【5頁】

字幕

1. 宝 PICTURE 宝塚キネマ株式会社製作
2. 孝子 五郎正宗
3. 脚色 川越亜聖 監督 久保文恵 撮影松浦 茂
4. 五郎正宗 都賀一司
藤大左近太夫行光 市川米十郎
妻 お秋 三保松子
息 新太郎 水谷春之
桶屋 太朗助 都賀清司

【6頁】

- | | | |
|--------|-------|------|
| 女房 | お吉 | 相生松子 |
| 助 入 | 加□広郎 | |
| 定 七 | マキノ正美 | |
| 新□吾 国光 | 平野仙造 | |
| 妻 お□ | 毛利安子 | |
| 侍女 琴□ | 西京子 | |
| 森川 馬之丞 | 岩松文男 | |

【7頁】

5. 五郎入道正宗
6. □なかりし頃―本朝廿四季の一つ背割正宗涙の物語―
7. “いつも熱心に見てゐるが今日は仕事の方は□□んだのか”

8. それから・・・
9. // 商□替えさして鍛冶屋へ奉公に・・・
10. // 毎日刀鍛冶の真似をしてゐる五郎は素人の俺から見ても素敵だ
11. // 実はお前がこのまま桶屋になるよりも・・・
12. // 一層刀鍛冶になつて・・・
13. // たとへ三度の御飯は食べなくつても・・・
14. // 思ひ立つたが吉日だこれから行光さんの処へ行つて・・・
15. // 外ならぬ太郎さんの頼みやからこの五郎を世話すること

【8頁】

になつた”

16. // みんな可愛ゐがつてやつて下され”
17. // 頼りにならぬ行光ちやがお前も県令に勤めるぢやぞ”
18. // 命を賭けても：御師匠様一人前にして戴くまでは死んだ心算で・・・”

19. やがて―其の年の暮れ―

20. 五郎

21. 五郎

22. // 槌の下し□目のつけ処―自□に備はつたお前の□□□”

23. // 初事とは思はれぬ鍛劍の妙―”

25. // 不思議だくと思つてはゐたが・・・”

【9頁】

26. // 貴様相州処の湯加減を盗みに来た何処かの刀鍛冶の小僧だなッ”

27. // 御師匠様何卒許して下さいませこれにはいろくと訳がありまして・・・”

28. A // この五郎のお母アは死んでしましてお父さんは行衛知れなんです”

28. B // 私の生みのお母アは京都の一□□へ御□□にとつて居りました”

29. // お父さんにあたる方は或都合で東国へ旅立ちましたまゝ・・・”

第一巻終り

第二巻

1. // せめて御名前かお処なりと伺はし□存じますに□明し下さらぬ御身様が恨めし□□います”

2. // 東周辺のしがたない刀鍛冶何れに世に出て身を立てました其の折に―”

3. // 私が生れてからは□□を慰められ乍らも長い年月―涙で日を送つて居りました”

【10頁】

4. //私が物心ついてからお母アと二人で或恥知らぬお父様を恨んで泣き明かした事でせう”
5. //そしてとうく父を尋ねて知らぬ旅路に宿りを重ねてこの宿のはずれまで来ましたが時お母アは―”
6. //妾はもう駄目らしい”
7. //妾がお前のお父さんに戴いた短刀ですこれを証拠に名前も分からぬお父さんを探し出して・・・”
8. //決して肌身を離してはいけないよ”
9. //俺アいやだ、俺アいやだ、お父ツつあんなんて居なくたってお母さへありやそれでいゝんだ”
10. //五郎きつと立派な刀打ちになつて―”
11. //お母ア俺の帰るまで―何故待つてゐてくれなかつたんだ”
12. //お母ア・俺ア一人ぼっちでどうするんだ”

【11頁】

13. //一度見せては呉れまいか銘はなくとも炉口の入れ様によつて解らぬ事もあるまい”
14. //御師匠様”
15. //赦しておくれ思い出せば十年前お秋を嫁りし後舅森川馬之丞殿のおかげで京都に上り”
16. //ある夜一条家からの御招きで左近太夫という名を戴きに参殿致せし折相知つたのが琴ねだつたのぢや”
17. //此の事を口外せずにはばらくの間ぢや辛抱しておくれ”
18. //あなたが出世なすつたのは一体誰れの御蔭なんですか”
19. //妾の実家の世話になつて京都へ行き五郎といふ子を―”
20. //かくし立てしたのは儂が悪かつたどうぞ穢嫌通して□□もお前の子と思つて可愛つてやつて下され”

【12頁】

21. 五朗の事が知れてから病身のお秋の病態は日増に悪くなつた
22. //五郎さん程の孝行者は此の世の中に又とありますまい”
23. //お前ひどく五郎の肩を持つてゐるがあの子がどうかしたのかえ”
24. //昨夜のことでしたよあまり喉がかわくんで台所へ：”
25. //神様何卒お母さんの病気を癒して上げて下さいませ”
26. //寿命になります事なら阿母さんの変りにこの五郎の一命を―”

第二卷終り

第三卷

1. // 義理なる母と思へばこそ夜中人知れず願掛けなさる五郎さんに……
2. // 一言位礼を言いなすつて満更笑ふ人もござんすまい
3. // そんなにあの子が思つてゐてくれるなら礼を言はねばなり
ますい。一寸呼んでおいで”

【13頁】

4. // 不孝者奴此の節夜なく怪しい苦しみをするかと思へばお前は
妾を祈り殺そうとして水を浴びて“
5. // おかみさんそりやあんまりひどすぎます思ひ違ひをしてゐなさる
のだ“
6. // 此夜のことを□れたら喜んで下さると思つたら……”
7. // 私の心が届かぬからでございました“
8. // 五郎の至誠天に達してか雪解けと共にお秋の病は消えて今宵
本腹祝ひの内宴が“
9. // あの婆さへ死んでしまつたら家も丸く五郎さんも幸福になるだ
らうになア“
10. // □れ者は兎角長生きするもんぢやて“
11. // お母さんにとりついた悪魔が二度と家へ入らない様に……”
12. // 五郎さんのです“

【14頁】

13. // さア皆さんと一緒に御飯を食べておしまひ“
14. // 今日はどうしたのか□□が悪くて……”
15. // 今夜はお前が祈り殺さうとした妾の本腹祝ひだから御飯が戴
けないのだらう“
16. // 五郎の姿が見えませんが“
17. // 月に浮れて遊び歩いてゐるんでせう“
18. // やつと親が知れてそれ嬉しいと思つたのも束の間あの鬼婆に遭
つて泣き暮らすなんて“
19. // 苦勞もあの子の為ぢや立派に名を上げた其の時は笑つて浸る思ひ
出話の一つにならうで“
20. // 桶屋へいって妾の悪口でもいつてゐるんでせうよ“
21. // 五郎なんか死ぬがい、や“

第三卷終り

【15頁】

第四卷

1. “この先生きてゐたとて五郎の住む家は何処にあるんでせう”
2. “でも……でも……この五郎が死んでしまつたら折角嬉んで下さつたお父様が……”
3. “五郎”
4. “よくこれ迄こらへておくれたつた”
5. “もう心配はいらぬぞこの叔父さんが引取つて立派に育て、やらうから”
6. “誰があんな鬼畜生に大事なお前を渡してなるものか”
7. “この五郎は金輪際兄上姉夫婦には渡されませぬ”
8. “森川馬之丞に義理立てして女房に頭上からぬ意気地なことは——”
9. “新太郎に家督を相続させんと五郎を毒害しようと”

【16頁】

10. “お秋さんは日本一の偉い女房だ”
11. “お秋の目に余る我儘——斬つて棄てたい行光□□世に義理人情の道が無かつたなら”
12. “娘の行状簿を知らぬではなかつたが子故の闇に迷ふ親馬鹿とか”
13. “森川馬之丞世間への申訳に——”
14. “貴方が手にかけるられる位なら農等親子は斯く泣いて暮らしたいと
いませぬ”
15. “お母さん早く逃げて——”
16. “騒々しいね新太郎が今寝たばかりぢやないか”
17. “何卒阿母さんを助けて上げて下さい”
18. “お秋よくも五郎さんをいぢめ通し大胆にも毒害せん——”
19. “私は死にませぬ決して死にませぬ”

【17頁】

20. “行光殿拙者の粗忽何卒許して下さい”
21. “お母さん御無事で……五郎はうれしい”
22. 孝道を守らんとして受けた五郎の傷が全く癒へた頃
23. “小父さん御達者で……”
24. “お前も元気で……”
25. “お前が立派な刀鍛冶になるその日を楽しみに待つてはあだがよんどころ

なく……”

26. “上方へ旅立たなくちやならねえ俺達はどうなに心残りだか”

27. “きつと五郎の居るこの村が恋しくなつて戻つて来なさるから……”

28. “私が一人前の刀鍛冶になつたと聞いたたら小父さんが又帰つてきてくれるでせうか”

29. “早く『五郎も名人になりました』と立派な姿を見せて

おやり”

興亜奉公 日本精神 国語から 台南州

30. 孝子五郎正宗 —完—

【データ採録者：田代勇人】【校正：森田健嗣】